

セッション「現代福祉国家思想の再検討」

組織者：橋本努（北海道大学）

現代の福祉国家を語るうえで準拠点となる経済学説は、とりわけ F.A.ハイエクと G.ミュルダールの思想であるように思われる。ところが従来、ハイエクの思想は、ケインズとの比較で語られることが多く、その内容は、福祉国家創成期におけるごく一部の論点にかぎられてきた。現代の福祉国家を捉えるためにはむしろ、ハイエクの思想を、彼と同時代を生きたミュルダールとの比較において捉えることが必要ではないか。本セッションを通じて、問題の所在と探求の方向性を明らかにすることができれば幸いである。

知的背景として注目したいのは、20 世紀半ばから後半にかけて、ハイエクとミュルダールの二人が、共通の諸問題を異なる角度から論じてきたことである。例えば、ハイエクにおける『隷属への道』（1944 年）と『自由の条件』（1960 年）は、ミュルダールにおける『アメリカのジレンマ』（1944 年）と『福祉国家を越えて』（1960 年）と、それぞれ同じ年に刊行されている。二人はまた、1974 年にノーベル経済学賞を同時に受賞しており、同時代の福祉国家像をめぐる、対立する主要なビジョンを提供してきた。しかも二人の対立は、福祉国家が一定の成功を収めた後の「ポスト福祉国家」をめぐる諸論点を含んでいる点に、思想的な広がりがある。

一般に、福祉国家が体制として成熟したのは 60 年代であり、70 年代以降になるとその理念が揺らいだとされている。社会民主主義の失効とそれに基づく新自由主義の台頭、という図式が私たちの一般的な理解であるが、しかし現代の福祉国家は、新自由主義と社会民主主義の要素をハイブリッド化した生態をもち始めているのではないか。そのような観点からすれば、60-70 年代のイデオロギー対立は、いかなる仕方で評価しうるだろうか。新たなイデオロギーの地平（小生はこれを「北欧型新自由主義」と呼んでいる）から歴史を逆照射するならば、「社会主義と資本主義の中庸としての社会民主主義」像ではなく、「社会民主主義と新自由主義のハイブリッド化」の可能性が、学説史・思想史的に探求しうるだろう。

この点に関して、福祉国家を超えて「福祉世界」を展望したミュルダールと、国家の機能をいわゆる「組織（目的をもった設計主義的秩序）」の範疇に含めなかったハイエクの思想は、興味深い論点を含んでいる。二人の学説には、体系化されていない空白の部分があり、かかる問題領域から、現代福祉国家の思想的源泉を探ることは、歴史の再構成を要請する点で、意義深いように思われる。